

「主体的・対話的で深い学び」の 視点からの授業改善と評価



帝京大学 教育学部

高田 彬成

2022. 7. 25

本日の話の内容

- 1 授業改善の視点について
- 2 体育科におけるICTの活用について
- 3 指導と評価の一体化について
- 4 技能に偏らない授業づくりについて

では、よろしくお願いいたします！

小学校 体育科の目標

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。
- (2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。
- (3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。

「体育の見方・考え方」

運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「する、みる、支える、知る」の多様な関わり方と関連付けること。



運動やスポーツが楽しさや喜びを味わうことや体力の向上につながっていることに着目するとともに、「すること」だけでなく「みること」、「支えること」、「知ること」など、**自己の適性等に応じて、運動やスポーツとの多様な関わり方について考える**ことを意図している。

体育の見方・考え方が働いている姿の例

- ・運動を楽しんでいる
- ・友達の動きを見て、よいところを認めたり、アドバイスをしたりしている
- ・友達の課題の解決の手助けをしている
- ・ゲームや競技会などの運営を進んでしている
- ・頑張っている友達に声援を送っている
- ・運動の行い方や楽しみ方をよく理解している
- ・運動やスポーツの意味や価値に気付いている

など

5

「保健の見方・考え方」

個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること。



個人の生活における課題や情報を、保健分野で学習する疾病の予防や障害の防止などの原則及び、健康で安全な生活についての概念等に着目して捉え、**病気に罹ったり、けがをしたりするリスクの軽減や心身の健康の保持増進と関連付ける**ことを意図している。

6

保健の見方・考え方が働いている姿の例

- ・日々の生活に関心をもっている
- ・健康の大切さを認識している
- ・自己の生活を見直し、生活の仕方や環境を整えようとしている
- ・自分の心や体の変化を意識している
- ・病気に罹ったり、けがをしたりすることを回避しようとしている
- ・心と体の密接なつながりを実感している

など

7

「体育や保健の見方・考え方」

見方・考え方を働かせる授業とは？

- 1 子供の発達の段階に留意
→12年間で見方・考え方を働かせることができるように
→小学校段階で大切にしたいことは？
- 2 運動やスポーツに対する偏見(運動はうまくなければ楽しめない 等)
→負の見方・考え方を膨らませることにつながる授業はNG
→運動やスポーツの意義や価値に気付くことが大切
- 3 最終的に、目指すところ
→健康の保持増進と豊かなスポーツライフの実現
→運動が大好き・大切と思う子供の育成(楽しい・またやりたい)

8

これからの体育指導で重視したい指導観の例

- 1 知識と技能を関連付ける指導
「わかる」と「できる」はつながっている
「わかってできる」を目指す
「うまくできないけどよくわかっている子」も大切に
- 2 体育ならではの表現力を重視した指導
「できる子はわかっている」→表現力の育成
オノマトペ、動きで伝える、動きながら伝える
表情、歓声や拍手、ボディコミュニケーション
- 3 共生社会の実現につながる指導
多様な「できる」を創り出す→技能の「できる」だけではない
みんなが楽しい、みんなを楽しむ
子どもたちそれぞれの楽しみ方を保証する

9

主体的・対話的で深い学び

- 運動の楽しさや健康の意義等に気付き、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて自ら粘り強く取り組み、考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの**主体的な学び**を促すこと。
- 運動や健康についての課題の解決に向けて、子供が他者(書物等を含む)との対話を通して、自己の思考を広げたり深めたりするなどの**対話的な学び**を促すこと。
- それらの学びの過程を通して、自己の運動や健康についての課題を見付け、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決するなどの**深い学び**を促すこと。

- ・「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」をそれぞれ独立したものとして、切り離して捉えることを示したものではない
- ・これらの学びの過程を相互に関連付けながら、体育科で求められる資質・能力の育成を充実させることが重要
- ・これら三つの学びの過程は、順序性や階層性を示すものでない

10

授業改善の視点を明確にもつ

例 対話的な学びの充実を図るための計画立案

- 1 時間数をどうするか、どんな学習活動を展開するか、どんな対話を引き出すか、そのための手立てをどうするか



4 対話的な学びを一層充実させるための改善策の検討

2 子供の対話の場面を意図的に展開

- 3 意図的な指導を展開した成果や課題の検証
・何がよくできて、何がよくできなかったのか

11

主体的・対話的で深い学び

主体的な学びの視点から授業改善を推進するためには、学習への興味や関心を喚起したり、学習の見通しをもてるようにしたりするとともに、学んだことやできるようになったことを自覚し、新たな学びにつなげることが大切。

授業改善の視点の例

- ① 子供の **何を** をどう喚起するか
- ② 学習の **何を** をどう明示するか
- ③ 本時または単元の **何を** と **何を** をどう明確にするか
- ④ 毎時間の **何を** をどう大切にするか
- ⑤ 本時または単元の学習の **何を** をどう確認するか

12

主体的・対話的で深い学び

① 興味や関心の喚起



易しい課題 → 最適な課題

- ・思わずやってみたくなるような場や活動
- ・難しすぎず、易しすぎない最適な課題
- ・運動の特性に触れることができる課題や活動
- ・安心して学習に取り組める
- ・「できるようになりたい」「勝ちたい」などの思いや願い
- ・「わかった」「できた」「自分で考えた」「自分で選んだ」

内発的な動機付けの源＝「有能さの認知と自己決定」
内発的な動機付けを促すことは
主体的な学びの充実に欠かせないと考えられる

13

主体的・対話的で深い学び

② 学習の見通しの提示

単元はじめのオリエンテーション → 単元全体の見通し

「こんなことをするのだな」「楽しそう」「やってみたい」
などの思いや願いを高めたい

本時の学習の見通しをもてるようにする

「〇〇をしよう。そのために、何をどのようにすればよいか」

具体的な学習の流れをわかりやすく提示→見える化

子供の発達の段階等を考慮し、見通しがもてる時間ごとに活動のまとまりをデザイン

14

主体的・対話的で深い学び

③ 課題と課題解決のための活動の提示

子供自身が「目標を達成するための課題は何か」に気付く
+
「課題を解決するためにどんな活動をすればよいか」を理解する



- ・課題の例と、その課題を解決するための活動を明示
- ・わかりやすく段階的に提示
- ・子供の思考・判断を促す課題の提示に留意(し過ぎない)

学習のどの時期に、どんな課題やどんな解決方法を
一人一人の段階等に応じて提示するのかについて、
学習への意欲等を考慮し、デザインすることが重要

15

主体的・対話的で深い学び

④ 学習の振り返り

「何が楽しかったのか」「本時は何を学んだのか」
「何ができるようになり、何が課題となったのか」
→自己の学びの振り返りを習慣化することが大切

学習の過程を確かめながら、スモールステップで丁寧に指導
子供の振り返りの状況により、次時の課題等の修正が可能

子供の活動が、課題の解決に結びついているかを見取り、
適切に助言し、学びの成果につなげていくことが重要

学習カードを活用した振り返りやICT機器を活用した学びの
軌跡の可視化など、具体的な事物をもとにした振り返りを促
すことも重要

16

⑤ 学びの成果の確認

「〇〇ができるようになった」「〇〇がうまくなった」
「〇〇がさらに楽しくなった」など、学びの成果をできるだけ多く
実感できるようにすることが大切
→「〇〇がうまくいかなかった」等も成果と捉えたい

子供相互の見合いや教え合いなどの活動の充実を図り、
他者からの称賛を得られる機会を増やすことが重要

教師による子供への言葉がけが子供相互の言葉がけに活用される



教師の語彙を増やすとともに、子供の学びの成果を見逃さず褒めたり、
意味付けたりすることが重要

主体的な学びを促すために

- 導入の工夫と雰囲気づくり
- 活動の見える化
- 適した課題の提示
- 場や用具、ルールなどの工夫
- 金の言葉がけ
- 苦手な子、意欲的でない子への配慮
- 教える・委ねるのバランス

など

対話的な学びの視点から授業改善を推進するためには、運動
についての課題を解決する際、他者(書物等を含む)との対話を
通して、自分の考えを広げたり深めたりすることができるように
することが大切。

授業改善の視点の例

- ① 子供一人一人の _____ を伸ばしているか
- ② 課題解決の場面などで _____ のある対話が展開されているか
- ③ 子供の _____ や動機付けにつながっているか

① 表現力の伸長

対話的な学びの充実を図るためには、子供が思考し判断した
ことを他者に伝える力を伸長することが大切((2)の指導)



- ・一人一人の課題を明確にし、思考・判断を容易にする
- ・課題の解決を目指して子供が気軽に声を掛け合ったり相談し合ったりできるようにする(雰囲気)
- ・運動の機会があればあるほど、他者に伝えたいことも増えることが考えられるため、運動量や運動機会の十分な確保が重要
- ・思考し判断したことを動きながら言葉に出したり、オノマトペを用いた多様な表現を引き出ししたりすることも重要
- ・「動きを通して伝える」「動きながら伝える」など、体育ならではの表現力の育成を目指したい
(他の教科等で実現できることは、敢えてねらわなくてよい)

② 必然性のある対話

対話的な学びは指導の目的ではなく、指導目標を達成するための手段であることを踏まえ、子供相互の有意義な対話を実現していくことが大切



子供が自己やグループの課題を解決するために、どんな言葉が飛び交うことを教師が目指すのかを書き出す
→その言葉を引き出すための場や活動を意図的に仕組む

思考・判断や対話のための語彙の源となる運動に関する知識を、学習資料として子供に対して段階的かつ効果的に提示することも重要

(3)に関連する言葉のやり取りも、(1)や(2)と同じように重視

③ 新たな気づきや動機付け

他者との対話が手掛かりとなり、子供の新たな気づき生まれ、思考・判断が促されたり、学習へのさらなる動機付けにつながったりすることが大切



見合いや教え合いのポイントを提示したり、グループで相談し合う観点を明確に示したりすることが大切

励まし合いや褒め合い、チームとしての意識を高揚させる声の掛け合いなど、感性や情緒に関する対話により、楽しさや意欲を高めることも重要

対話を重ねることで、さらに主体的な学びへとつなげたい

対話的な学びを促すために

□見eye、教えeye、励ましeye、助けeye、褒めeye
(「目は口ほどにものをいう」)

□言語環境づくり
(子供の対話は教師から)

□課題の具体化

□ボディ・ランゲージ

□五感を働かせ、第六感を引き出す

など

深い学びの視点からの授業改善図るためには、子供が学習の過程において、課題の解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深めるとともに、体育の見方・考え方を働かせることができるよう、指導を工夫することが大切。

授業改善の視点の例

- ① 易しい課題に終始せず を促しているか
- ② 課題の解決に向けた に深まりが見られているか
- ③ を働かせているか

① 試行錯誤の促し方

子供が課題の解決に向けて試行錯誤を繰り返し、他者の力を得ながらも自らの力で課題を解決できるようにすることが大切



- ・挑戦意欲を掻き立てるような課題の提示
- ・いろいろな方法を試しながら自分なりの行い方を見付けていく楽しさに気付くことができるようにする
- ・発達の段階等を考慮し、飽きのこないよう留意しながら、粘り強く課題の解決を促すための指導
- ・単元計画を見通し、「教えること」と「子供に委ねること」を整理
- ・子供の気付きや発見等を重視し、学習を容易に流さない

子供にとって必要感のある学びや活動であることが、深い学びにつながる原動力になるものと考えられる
→学習する意味とも関連

② 思考の深まり方

深い学びの目指すところは、教材と豊かに関わり、運動の特性に触れる楽しさを味わうとともに、運動の意味や価値等に気付くようにする



- ・育成を目指す資質・能力の三つの柱をバランスよく指導
- ・技能だけが「できる」ではなく、知識や思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等に関する様々な「わかる」「できる」を実現していくことが重要
- ・そうした過程において、課題の解決に向けた「思考」が深まっていくものとする

運動が苦手な子供や運動に意欲的でない子供への指導の充実を図り、長期的な視点で全ての子供に深い学びの実現を目指すことが重要

③ 体育や保健の見方・考え方の醸成

発達の段階に応じて、見方・考え方を育てていくとともに、見方・考え方を働かせる場面を設定することが大切



- ・運動を楽しく行い、動きや技能が高まるとともに、体力の向上を実感できるような場面を設定
- ・運動についての子供相互の見合いや教え合い、新たな知識の獲得が、楽しさや喜びにつながるようにする
- ・自己の適性等に応じた運動やスポーツとの関わり方について考えることができるようにする

「運動はうまくなければ楽しめない」などの偏見(負の見方・考え方)を抱くことのないよう留意

深い学びを促すために

- こだわりを大切に
(あえて、揺さぶりも必要)
- 腑に落ちている瞬間を見逃さない
(子供は声や表情、動きなどで合図する)
- 多様な「できる」を認め、教科としての魅力を実感できるように
(体育 楽しく 逞しく)

など

授業づくりのポイント(4つの視点)

- 1 教材の特性に触れることができる活動で組み立てる
 - ・運動の特性を重視し、楽しさを味わえるようにする
 - ・その単元ならではの動きの習得や、課題解決を中心に
 - ・場や用具の工夫、行い方やルールの工夫に余念なく
- 2 易しい課題から始め、最適の課題を提示する
 - ・易しい=安全・安心→難しくない・自分でもできる→有能感
 - ・成長欲(もっと伸びたい)と承認欲(先生、見て見て)
 - ・過度の競争心を掻き立てない(勝負にこだわりすぎない)

29

- 3 学びの内容を明確にする
 - ・楽しいだけでは、十分とは言えないが、楽しいをベースに
 - ・楽しくなかったが「身に付いた」→求めていない(NG)
 - ・楽しく行い、「身に付ける」を目指すのが授業
 - ・「遊び」としての自由さ、創造性、自発性、非拘束性等に留意
- 4 各単元で育成を目指すことを段階的・計画的に遂行する
 - ・一度に多くは叶わない→全体への浸透と個々へのアプローチ
 - ・単元のbefore→afterを明確に語れるように(全体・個々)
 - ・1年かけて、2年スパンで、3年間・6年間で...教育は根気
 - ・大切なのは、教師の意識(意識が変われば、行動が変わる)

30

【これからの授業に不可欠】体育科におけるICTの活用

GIGAスクール構想により児童への1人1台端末
(タブレット)の積極的な活用が推進

タブレットを「使用する(使い用いる)」のではなく、「活用する
(活かし用いる)」ことの重要性

1 タブレットは目的やねらいに応じて用いることが大前提

- ・「使用すること」そのものを目的化しない
- ・タブレットを使わなくてもできることに、敢えて用いない
- ・タブレットを使うことで指導の効果が高まることに特化して用いる
- ・場面を選択のうえ適宜用いるという基本姿勢を忘れない

31

2 タブレットを使用することで運動に従事する時間や課題を 解決するための時間が減少することは避ける

運動領域(体育分野)では、タブレットを用いることで動きや技能の理解が深まるとともに自己の課題が明確化し、運動に取り組む意欲が高まることを目指し、その結果、運動に従事する機会や時間が増加したり動きや技能の習得に繋がったりすることなどをもって、「効果的に活用」と言える

保健領域(保健分野)では、タブレットを用いることで課題の解決に拍車がかかったり、新たな課題追究の意欲へと繋がったりすることなどをもって、「効果的に活用」と言える

3 タブレットの活用方法の精選において留意が必要

タブレットがなければ肉眼でしっかりと動きを観察し、友達に改善点等を伝えようとする一方、タブレットがあれば録画をしてあとでゆっくり再生すればよいため、その場でしっかりと観察しようとする意識は働きにくい

32

タブレットがなければ、「手の着き方がこうだったよ」と身振りなどの実演を交えて様々な工夫をこらしながら相手に伝えようとするのが、タブレットでの撮影によって、そういったコミュニケーションの一部(または大部分)が省略されてしまうこともある



タブレットがあれば便利に思えることも、児童の集中力や観察力、コミュニケーション力の伸長を妨げるなどの負の要因になっては本末転倒



どんな場合でも「使わないより使ったほうがよい」と考えるのではなく、タブレットを用いることの有効性を確かめながら、適切に活用することに留意することが大切

33

4 情報の管理に努める

タブレットに蓄積された情報が、児童本人のものであれば大きな問題はないが、仲間の運動の様子や課題解決の過程・結果などがわかるデータも混在する場合には、たとえ学習目的であっても著作権や肖像権の侵害等につながる可能性があるため、細心の注意や指導が必要



学習後は自分の画像や映像以外は消去すること、自分以外に関する映像や記録データなどは、勝手に転用したり他者に渡したりしないこと、学習中に得られた情報はむやみに外部に流さないことなど、情報モラルの周知徹底に努めることが大切

34

運動領域（体育分野）における活用

1 動きを撮影し、再生する

動きを動画で撮影し、後から見返すことにより、気付かなかつたりわかりにくかつたりした動きが映像として具体化され、自己や仲間の課題がより明確になる

自己の動きを客観的に捉えることができるようになる

撮影された動画は、本人の許可を得つつ必要に応じてモニターなどの大画面でクラス全体に共有化を図ったり、学習の軌跡としてタブレット(またはクラウド上のフォルダ)に保存して蓄積し、後に振り返りや学習評価に用いたりするなど指導と評価の両面から活用できる

児童にとっても、学習のbefore-afterを視覚的に捉えることができるため自己の学習の成果や課題を確かめたり、さらなるモチベーションにつなげるきっかけとなったりする

35

児童同士の見合いや教え合いにおいては、映像を何度も再生したり、スローや静止をしたりできるため、より具体的で明確な感想やアドバイスを伝え合うことができるため、仲間と協同して学習する態度の指導や、気付いたことを互いに伝え合うなどの言語活動の充実にも効果的

タブレットを用いた撮影や再生等の操作に児童が予め十分に慣れておく

学習時間中にタブレットの操作に手間取ると、肝心の運動従事時間が削られてしまうことに繋がりがかねない

GIGAスクール下での学習の充実は、タブレット操作の熟達の程度にかかっていると看做しても過言ではない

児童のタブレット活用のためのスキルアップの機会を、教育活動全体で養われていくことが前提であり、体育・保健体育の時間とは別に確保しておきたい

タブレットの活用スキルが十分でないうちは、授業の効率性や運動機会確保の点から、体育・保健体育での使用に慎重にならざるを得ない

36

2 目標とする動きを可視化する

映像資料は、児童が模範となる動きを理解する際に、紙による図解資料より具体的であり、学習効果が高い

教師や仲間が、その場で模範となる動きを披露しても、瞬時に動きの詳細を理解するのは難しいが、映像資料であれば、スロー映像や静止画像はもとより繰り返しの視聴ができるため、学習者の理解を深めることができる

映像を活用する際の留意点としては、学習者が用いる映像資料が正確かつ効果的であるかどうかを、予め教師が吟味しておくことが大切

特に、インターネット上の動画の中には、必ずしも正しい動きや解説をしているものばかりではない

児童の学習の段階を考慮し、適時性を踏まえた映像資料を選定しておく

児童に動画の検索を委ねるのではなく、予め教師がピックアップしておいた動画を共有フォルダなどで紹介しておき、その中から用いるようにする

37

3 動きや課題の共有化を図る

児童の個々の課題解決を学級全体に紹介したり、多くの学習者に共通する課題について取り上げたりする際には、大型スクリーンや電子黒板等による映像の再生が有効

課題の解決前と解決後の動きの映像を、解説を加えながら大型スクリーンに映すことにより、学級全体で学習成果の共有を図るとともに、個々の課題解決の参考にしたり、児童相互の認め合いの一助にしたりすることができる

ボール運動(球技)において、ボールを持たないときの動きを説明する際、実際のゲームの映像を電子黒板に映し、マーカーペンを使って空いているスペースを書き示したり、「この人はこの方向に動くとパスを受けやすい」と矢印を書き加えながら、具体的な動きの例を説明したりする指導も効果的

表現運動(ダンス)の集団演技において、発表の様子を録画し、終了後に映像を再生しながら感想を交流し合うことも効果的

38

保健領域（保健分野）における活用

保健領域(保健分野)の授業におけるタブレットの活用には、「課題を見付ける」「調べる」「課題を整理する」「学習をまとめる」など、学習の各局面に応じた効果的な活用が期待

「課題を見付ける」局面においては、教師が提示した資料や情報から、児童が何を読み取り、何を感じ取り、何に気付くことを目指すのかなど、資料等のもつねらいや目的を明確にしておくことが大切

「調べる」局面においては、GIGAスクール下では特に、保健で活用できる膨大な資料の中から、児童が情報を取捨選択できる力を養うことが必要

授業で用いる資料などの情報を予めある程度絞り込んでおく

「自由に調べてみましょう」というのでは收拾がつかなくなるため、「〇〇について国から出されているデータを調べましょう」のように、範囲を指定し、その中から選び調べられるようにする

39

「課題を整理する」局面においては、児童が各自で調べていることをグループチャットや掲示板等を用いて発表し合ったり、共有フォルダを用いて仲間同士で見合えるようにしたりしながら、課題解決の過程を確かめるとともに、教師から適宜まとめに向けた方向付けをすることが大切

「学習をまとめる」局面においては、本時のねらいを踏まえ、課題を解決できたかどうか、新たな課題や疑問等が生じたかどうかなどについて、投票機能を用いながら、児童の学習の習得状況を把握することができる

紙ベースの学習カードからデータベースの学習シートに移行することにより、児童の学習の進捗状況や習得状況をいち早く把握することができる

今までは授業中にフィードバックすることがなかなか難しかった児童からの疑問などにすぐに答えることが可能

ミニテストによる知識の習得状況の把握についても、児童が回答を入力すれば、その場で正誤が整理され、正答数や正答率がすぐにわかるため、児童が自己の学習の振り返りにも役立てることができる

40

「知識」の評価における活用

テスト作成アプリやゲーグルフォーム等を活用し、習得を目指す知識に関する質問事項を作成して都度提示し、授業の際に児童が回答を入力(または選択)し、教師が集計すれば、学習の進行に即した知識の獲得の程度を確認することができる

従前、質問紙を用いるなどして、学習のまとめとして知識を評価する傾向が見られたが、GIGAスクール構想環境可においては、児童の回答を瞬時に集計し、正答か否かを評価することができる

そのため、児童へのフィードバックも容易になり、次時の指導に生かすことも容易になる

知識の評価は、教師がその習得状況を把握するために行うのではなく、児童一人一人の学習状況を順次確認し、課題があればさらなる指導を行い、最終的に全ての児童に着実な習得を目指すために行うもの

41

「技能」の評価における活用

運動領域・体育分野における「技能」の評価においては、学習中の動画撮影のデータの蓄積を効果的に活用することに留意したい

学習の様々な場面で児童が(または自動で)撮影した映像を見返すことで、学習中に教師が見取る以上に多くの情報を得ることができる

教師の見取れなかった児童の動きや活動が録画されたデータから、技能の評価につながる情報を見付けることが期待できる

映像上での出来映えをもって技能の評価をすることは拙速であるが、学習中に教師が気付かなかった点を確認できれば、次時において実際に自身で見ても確かめるなどの評価行動につながる

動きやプレイなどの様子を映像に残すことで、児童の個々の学習の成果がより明確になるとともに、教師による客観的で精度の高い評価につなげることができる

42

「思考・判断」の評価における活用

運動領域・体育分野においては、撮影された動画をタブレットで繰り返し再生(スローや静止画像を含む)することで、自己(自他)の課題を見付ける(発見する)ことが期待できる

一瞬で見えにくかった動きの静止画像や、スロー再生にして初めて気付く動きの発見など、タブレットの長所が教科の特性にマッチするため、学習効果を一層高めることができる

模範となる動きと自分の動きとを比べて課題を見付けたり、自分や仲間のよい動きに気付いたりするなど、児童の発達の段階に応じた「思考・判断」に資する活用が期待できる

運動中には気付かなかった自己や仲間の動きの課題が、動画を見返すことで明らかとなり、動きの改善に向けたモチベーションも高まることが期待できる

43

保健領域・保健分野においては、統計データの読み取りや調べ学習などから、健康や安全に関する自己(自他)の課題を見付け(発見し)、その解決のために思考し判断する際に、タブレットが手元にあると大変便利

従前は印刷物やパワーポイントでの資料提示のみであったが、タブレットがあれば統計データを色付きで見たり、もう一度見たい画面に自由に戻ったりすることができる

GIGAスクール構想環境下でのタブレット活用には、学習の中心とも言うべき思考・判断を促し、児童のさらなる気付き(発見)を引き出す

課題の発見が容易になれば、解決方法を考えたり工夫したりする意欲を高め、児童の思考力・判断力の伸長につながることを期待できる

思考・判断したことをタブレットを用いて教師に送信することで、児童の課題設定や課題解決の状況を教師が把握することができるため、学習の即時評価につながるのと同時に、必要に応じて発問や説明の追加をするなど、授業改善に資することが期待できる

44

「表現」の評価における活用

「表現」の評価においては、思考し判断したことを他者に伝える手段の一つとして、タブレットの活用が考えられる

発表が苦手でも、タブレットからであれば意見表明ができる児童が少なからずいるものと考えられる

タブレットを用いて表現することの意味や楽しさを味わうことができれば、児童の表現力の伸長に役立つことができる

「どの意見に賛成か」を挙手して聞いていた時代から、タブレットで投票し、数や割合まで瞬時に出力される時代へと移ったことで、授業の勢いにも変化が生まれることが期待できる

45

「主体的に学習に取り組む態度」の評価における活用

「愛好的態度」については、進んで(積極的に・自主的に)運動に取り組む態度を、実際の運動場面だけでなく、保存された映像から見取ることができる

タブレットの活用によって技能の課題や思考・判断の解決方法などがより明確になれば、運動への意欲を高めたり、運動従事時間や回数を増やしたりすることに繋がり、愛好的態度の評価機会も増えることが期待できる

「公正・協力」については、タブレットで撮影し見直すことでゲーム中のプレイや判定に関する状況をより正確に振り返ることができる

仲間の工夫や努力、困り感などに気付くことができるなど、公正な態度や仲間と協力する意欲、仲間を称えようとする意欲などを引き出し、それら进行评估することが期待できる

46

「責任・参画」については、タブレットを用いることで、練習やゲームを動画で撮影する人、得点を入力する人、記録を測定する人など、学習における様々な役割をつくり出し、それらの役割をしっかりと果たすなど、自分が仲間の役に立っていることを実感できる場面を創出することで、指導と評価の機会をさらに増やしていくことが期待できる

「共生」については、タブレットに収められた動画などの情報をもとに、より具体的に仲間の考えや取組に触れることで、共感的理解を促したり、共生の意識を育んだりすることが期待できる

タブレットを用いることで、「する」だけでなく、「みる」「支える」「知る」など運動との多様な関わり方に気付くことができるようにすることにより、評価の機会につながることを期待できる

「健康・安全」については、タブレットに収められた動画の中に、偶然に撮影されたヒヤリハットな映像があれば取り上げ、指導に生かすなど、映像を用いて具体的に説明することにより、児童の安全に行動する態度の育成につなげる

47

【小学校】投の運動(遊び)導入の背景

- ・投能力の低下に歯止めがかからない状況(握力と同様)
- ・日常生活で投動作の発生場面が少なくなったという指摘
- ・外遊びの中で自然と動作等が育まれる時代ではない
- ・そもそも、子供の三間を保障できていない現状
- ・投動作の低下は、将来の運動種目の選択にも悪影響
- ・投動作は全身運動であり、幼少期から取り組みたい動き
- ・ボールを握る、投げる、捕ることで腕の動きや握力の向上にも期待

48

投動作の指導は目に見える

- ・教わっていない(未知)→教われれば伸びる→有能感が高まる
- ・記録の伸びが明らか(走り高跳びでは、どんなに伸びても数十cm)
- ・投の粗形態を獲得することにより、易しい運動となる
- ・格好いい動きが比較的容易にできる
- ・何度も繰り返すことで、学習の成果が得やすい
- ・自分の間合いで恐怖心なく取り組むことができる
- ・陸上運動系の特性(競争と達成)に合致
- ・投能力のうち、陸上運動では遠投能力に主眼を置く

49

子どもができる(自分の課題を解決する)ことをめざすなかで、3つの資質・能力は育成される

- 技能だけが「できる」ではないことを再確認したい
- ・運動の行い方がわかる
 - ・自己の課題が見つかる
 - ・課題解決の仕方がわかり、取り組める
 - ・友達と教え合ったり協力し合ったりできる
 - ・準備や片付けができる
 - ・安全に気を付けて楽しく運動ができる など

さまざまな「できる」を認め、ほめる→有能感を高める

一人一人が「できる喜び」を味わうためには、自分の思いをもち、考えながら取り組むことが必要

体育においては、常に「できること」から学習を始める

- ・できる→もっとできる
- ・できない→もう少しでできる
- ・できたりできなかつたり→確実にできる
- ・できる=成長であり学習した意味(学びの原動力)
- ・できない、楽しくない→課題を解決しようとしな
- ・できる、楽しい→もっと上手に、もっと楽しくなるように

考えてごらん→考えたくなるような場や仕組みが大切

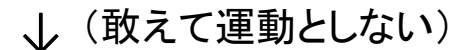
「主体的・対話的で深い学びの実現」



そもそも、学習が楽しくなければ実現しない



各領域の特性に応じた楽しさ(楽しみ方)を味わい(知り)、その**学習**が好きになる



領域特性を踏まえた学習を楽しく行うことで、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す

52

(例) かけっこ・リレーの学習の楽しさ(楽しみ方)

- ・友達と一緒にかけっこやリレーできて楽しい、勝敗を競って楽しい
- ・チームの一員として活動できて楽しい
- ・タイムが縮まって楽しい、調子よく走れて楽しい
- ・バトンをもらえて楽しい、バトンを渡せて楽しい
- ・チームに合った作戦を選び、実現しようとして(実現できて)楽しい
- ・友達と課題を解決(一緒に活動)できて楽しい
- ・友達にアドバイスできて(認められて)楽しい
- ・友達の走りを見たり応援したりして楽しい
- ・教室での勉強でないから楽しい

楽しさ(楽しみ方)は子どもそれぞれ→自己に適したスポーツライフ

体育の学習を楽しむために

学習を楽しむことだけが目的ではない、しかし体育は楽しくありたい
楽しく行い、3つのねらいに迫ることが大切

3つとも叶えば大成功だが、2つでも、1つでも叶えたら成功
もうやりたくないと思わせ(モチベーションを下げ)たら大失敗

あなたが、かけっこ・リレーの学習を楽しむためには？

あなたが、今よりもっとかけっこ・リレーの学習を楽しむためには？

子どもは、自分で決めた(考えた)ことは達成しようとする

大切なのは、有能さの認知と自己決定

(やればできる・認められるという自信と自分で決めた・選んだ)

54

楽しく行えていたかどうかの見取り(例)

- 1 観察...児童の活動の様子からの見取り
- 2 聞き取り...児童が発した言葉や動作等
- 3 質問紙...形成的授業評価シート等
- 4 学習カード...児童の振り返りから など

55

楽しさレベルの見える化(例)

- 1 表情や動き...どんな表情?どんな動き?
- 2 発する言葉...どんな言葉?
- 3 数値化...質問紙を3~5件法で
- 4 振り返り...学習カード、作文等 など

56

楽しさの質的な高まり(例)

- 1 運動の特性に触れて楽しい→教材の魅力如何
 - 2 友達と動いて楽しい→生理的・社会的欲求の充足
 - 3 自己の課題に取り組んで楽しい→自己決定・没頭
 - 4 自己や仲間の課題を解決して楽しい→達成・成就
 - 5 仲間と共有して楽しい→関わり・自己実現・共生
など
- 重要なのは、育成を目指す資質・能力との関連

57

楽しさを左右すると考えられること(例)

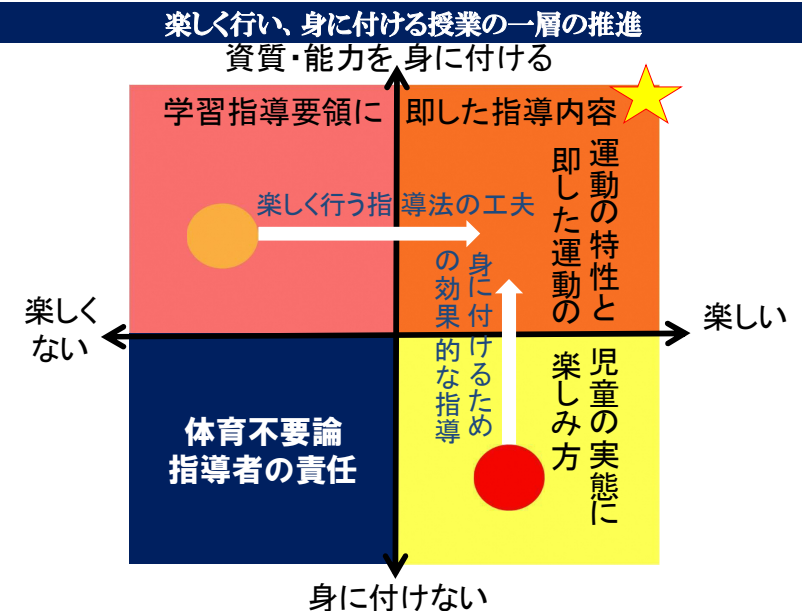
- 1 教材のもつ特性...楽しさを味わえるように
- 2 学習集団...クラスの間関係、グループダイナミクス
- 3 教師の関わり...言葉がけ、雰囲気づくり、指導法
- 4 必要感...学習する意味や価値
など

58

「楽しく行い、〇〇を身に付ける」指導(例)

- 1 導入の工夫...はじめを大切に
- 2 場や用具の工夫...「易しい」から「最適な課題」へ
- 3 関わり合い...児童相互、教師の関わり
- 4 評価...児童を適切に評価することが授業改善の肝

59



60

よりよいスポーツライフを志向したかどうかの検証

- 1 学習の「楽しさ」をどう捉え、どの程度味わえたか
- 2 次につながる「楽しみ」にどうつなげられたか
- 3 目指す資質・能力がどの程度育成されたか
- 4 体育や保健の見方・考え方がどう育成されたか

など

61

子どもの学びを成長した姿としてどう見取るか(例)

- 1 beforeの姿を明確に捉え、afterの姿を目指す指導
- 2 課題を見付けその解決を図る過程の姿の見える化
- 3 主体的・対話的で深い学びの視点からの検証
- 4 評価規準の設定と信頼性・妥当性のある評価

など

62

「指導と評価の一体化」とは？

●フレーズによって陥りやすい学校現場の勘違い

指導と評価を連動させる視点から、「指導したことを評価する」という考え方を指すものではない

誤認例1: 本時は、技能について重点的に指導し評価する

誤認例2: 本時の目標と、評価の視点を一致させるという考え

- ・指導と評価の一体化というのは、「指導することと評価することを同じ時間で実現する原則」を意味しているものではない
- ・「このことを評価する必要があるから、このように指導を展開する」という指導と評価の連動性を意味するものでもない

63

では、「指導と評価の一体化」とは？

「指導と評価の一体化」とは、指導と評価はそもそも切り離せず一体的であるということを表したものである。したがって、本時の中で、指導したことを評価することを意味しているものではない

例: 本時で技能の指導を重点的に行うが、その評価は次時以降に行うことも十分に考えられる(むしろ、そうすべきである)

指導することは、児童を評価しながら指導することであり、「わかっているか」「できているか」も見取らずに一方向的に指導することは、指導と評価の一体化とは言えない

指導したことを全て観点別評価規準に基づいて評価する必要はない→「多くのことを指導するが、観点別にABCなどの評価として記録するのは、そのうちのある一部分について」という整理でよい

64

「指導と評価の一体化」を進めるために

- 1 適切な指導は、適切な評価のもとに成り立つ
 - ・何ができて、何ができていないかを見取り、指導に生かす
 - ・指導し、児童の変容(成長)を見取ることで、自己の指導の有効性が検証される
 - ・指導し、「わかった」「できた」なら指導に一定の効果が確認
 - ・指導したが、「わからない」「できない」なら、指導の工夫が必要
 - ・指導の有効性は、児童を評価することで確認できる
 - ・教師の指導が適切かどうかは、児童が示してくれる
 - ・「答えはすべて、授業にあり」→授業研究に邁進したい

65

「指導と評価の一体化」を進めるために

- 2 指導と評価の計画を立案し、P→D→C→A→Pを実現
 - ・計画なくして、実行なし(授業も学校行事も同様)
 - ・前述の通り、教師の指導は児童を評価することによってその都度修正される→これぞPDCAそのもの
 - ・計画通りにいかなくて当たり前→計画通りにいくことの方が少ないという考え方もある
 - ・計画通りにいかないなら、計画する意味がない？それは大間違い→綿密に計画するからこそ、修正点や課題が明確化
 - ・授業の上手な人ほど、計画上手で軌道修正上手

66

「指導と評価の一体化」を進めるために

- 3 児童の思考・判断・表現を学習の中心に **身体をとおして思考する教科**
 - ・学習の中心は、技能の習得ではない(体育=技能教科は古い)
 - ・技能の習得は、児童にとって目標であり、課題設定の源であることは言うまでもない→「できるようにないたい」「もっと上手になりたい」「勝ちたい」→そのために、何を？どうすれば？が学習の意味
 - ・「何を」(課題)と「どうすれば」(課題解決の方法)こそが学習の中心→技能の習得は、結果としてのパフォーマンス形成
 - ・指導が、技能指導に偏っていないか？児童の思考・判断力を高め、表現力を伸長する指導に留意→ティーチングからコーチングへ(例:スイミングクラブのインストラクターとの相違点を明確に)

67

学習評価を見直す視点

- ①児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと
- ②教師の指導改善につながるものにしていくこと
- ③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」

(平成31年1月 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会より)

評価の改善は授業の改善に欠かせないもの

68

「指導したことを評価する」
指導していないことは評価する範疇にない

では、「指導したことを全て評価するのか？」

答えは「YES」

学習者の学習状況进行评估しなければ
自身の指導の有効性や改善点等が不明確のまま
指導者にとって、指導の良し悪しを教えてくれる
最も身近で的確な評価者＝学習者

69

指導したことを全て
記録に残す評価とする必要はない

観点別評価規準に基づき記録として残す評価は、単元を見通して
適切な時期に適切な回数を設定し実施するもの
指導する内容の全てに評価規準を設定するものではない

授業の中心は指導
指導したことを絶えず評価しつつ、
よりよい指導を模索していくことが授業改善の姿

70

指導者が最も留意しなければならないのは、
指導する内容を明確に捉えること

何を指導するかは、指導の目標(目指す児童の姿)と紐づく
本単元で育成を目指す資質・能力の具体を明確にし、
限られた時間の中で計画的に指導し、目指す児童の姿に導く

「こんな児童の姿にするためにこんな指導をする。だから、ここでこんな評価をして学習の成果や課題を確かめる」という必要感に由来

学習評価の視点から指導内容を捉える意味を踏まえたい

71

体育における評価のあり方

評価のための指導ではなく、
育成を目指す児童の姿の実現のための指導
その実現状況进行评估することで

指導の修正が図られるという指導と評価の往還が重要
指導の中心となる「技能の習得」の状況ばかりを評価するのではなく、
技能の習得に向けた自己の課題解決のための思考力、
判断力、表現力や、主体的に学習に取り組む態度
(公正・協力、責任・参画、共生、健康・安全)の育成に向け、
指導したことをバランスよく評価することが大切
「評価の改善は授業改善と両輪」

72

知識の見取り

「～についての行い方を理解する」

- ・技などの名称等を含め、動きや技能、作戦などについての知識
→学習カード、発言、話し合いでの様子など
- ・ゲームのルール、技や動きのポイントやコツ
→学習カード、発言、動いている姿
- ・順番やきまり、行い方についての約束など
→(3)に関する知識のため、(1)での評価はしない
- ・技能と関連付けて指導し、評価
→できている＝わかっている できていない子に留意し見取る

73

技能の見取り

「動きや技能がどの程度身に付いている」を見取る

- ・「概ね満足できる状況」(B)と「十分満足できる状況」(A)
→評価規準を作成し、観察によりパフォーマンスを評価
- ・BとAの間の段差を明確に
→例「安定して行えるならA」とした際の安定とは？
- ・Bに達していなければC(技能のCは運動が苦手の烙印であり酷)
→CをBにする指導(教師の腕の見せ所)
- ・たとえ技能はCとなったとしても、知識をAまたはBに
→知識・技能としてはCを付けなくてよい指導(C＝指導の敗北)

74

思考・判断・表現の見取り

「課題を見付ける(発見する)」「課題を選ぶ」

「活動(取り組み方)を工夫する」「他者に伝える」

- ・「課題を見付ける(発見する)」...やってみて不自由さに気付く
→うまくできるようにするにはどうすればよいか考えること
- ・「課題を選ぶ」...自分に合った場や方法の選択が思考・判断
→場や活動を選び、繰り返し試す(修正することも思考・判断)
- ・「活動(取り組み方)を工夫する」...提示された解決方法を自分流に
→よりよい解決方法を選び、繰り返し試しながら工夫する
- ・「思考し判断したことを他者に伝える」...言葉や文字、身振りなど
→体育ならではの表現を認め、表現力を伸ばしたい

75

主体的学習に取り組む態度の見取り

「愛好的態度」「公正・協力」「責任・参画」「共生」「健康・安全」

- ・「進んで(積極的・自主的・主体的に)～する」→運動に進んで(積極的・自主的・主体的に)取り組もうとする姿
- ・「ルール(やマナー)を守る」→規則やルールを守ろうとする姿
- ・「仲よく協力する」→友達(仲間)との対人関係を築こうとする姿
- ・「分担した役割を果たす」→自分の責任を全うしようとする姿
- ・「友達(仲間)を認める」→友達(仲間)の取組を認めようとする姿
- ・「安全に留意する」→危険回避、安全な環境設定をする姿
- ・「粘り強さ」と「自己調整」→体育においては、5つの主体的態度に溶け込んでいると捉える(粘り強さや自己調整をしながら、5つの態度は育まれるという考え)

76

指導と評価の一体化についての基本的な考え方

1 指導する事項を明確にする

児童の実態を踏まえつつ、学習指導要領の趣旨等に基づき、本単元で指導する内容を明確にする。特に、体育科運動領域においては、教科書がないこと等を踏まえ、各学年の指導内容及び指導方法の在り方について、学習指導要領解説体育編はもとより、国や都道府県、市町村等が作成する体育指導の手引きや副読本等を参考に、各学校で十分に吟味し指導することが求められる。

2 評価の観点と評価方法を明確にする

指導内容を明確にしたうえで、評価の観点を設定するとともに評価方法を整理する。その際、各時間において指導したことを全て評価することに留意する必要はない。体育科・保健体育科で育成を目指す資質・能力のうち、本単元で重点的に指導し評価する事項を明確化し、設定した評価方法に基づき適切に評価することが大切である。

77

指導と評価の一体化についての基本的な考え方

3 評価する機会を設定する

指導する事項のうち、いつ、何を、どのように評価するのかを計画する。計画的に指導したうえで、適切に評価することが求められる。その際、**評価のための指導に陥ることのないよう留意することが大切である**。評価が先にあるのではなく、まず指導があって、児童の学習の過程や結果の状況と評価規準とを重ね合わせながら、適切に評価する。本時で評価した結果については、次時以降の指導の改善に資するようにすることが大切である。また、指導したことをその時間内に評価するのではなく、引き続き指導する観点から、敢えて指導と評価の時間をずらすことも考えられる。さらに、単元の前半に設定する評価については、その結果をもって単元全体の評価とするのではなく、単元後半につなげる指導のための評価という観点を踏まえ、**必要に応じて単元終了時まで指導と評価を繰り返すことが大切である**。

78

毎時間の観点別評価の進め方

(1) 指導と評価の重点化

毎時間の指導においては、単元目標を踏まえ、育成を目指す資質・能力の三つの柱(以下、「三つの指導」と表す)に基づき目標を設定するが、全ての児童に全てのことを指導し評価することは現実的ではない。三つの指導に留意しつつも、本時において重点的に指導する内容(以下、「重点内容」と表す)を絞り、指導することが想定される。その際、重点内容の指導と同時間内に評価を行う場合があるが、技能や主体的に学習に取り組む態度のように、習得や活用の段階等を踏まえ一定期間を置くなど、指導と評価の時期をずらして評価を行う場合も考えられる。したがって、重点内容と本時の評価の観点が必ずしも一致するものではないことに留意。

重点内容を絞ることは、授業改善の視点を踏まえたPDCAサイクルの確立の観点においても重要。児童の実態等を考慮し、重点内容を計画的に設定することは、指導内容の明確化を図るとともに、評価計画の立案にも生かされるものであるため、指導と評価のつながりをより確かなものとする。

79

毎時間の観点別評価の進め方

(2) 評価後の指導の継続と再評価の重要性

ある児童において、単元の前半に評価の機会を設定した項目においてBまたはCであったものを、単元の終盤までにAまたはBとなるよう指導の充実を図ることが本来の評価の在り方であることから、単元の前半に評価したことをもってその観点の評価を確定することには留意が必要である。指導したことがどの程度身に付いているかを評価することは、単元の途中や終盤等において指導方針の修正を図るうえで極めて重要である。つまり、単元目標を踏まえて評価規準を作成し、評価の観点を明確にしたうえで指導に当たることにより、指導内容が一層明確になると考えることができる。

80

毎時間の観点別評価の進め方

(3) 指導と評価の計画の柔軟な運用

評価のための指導にならないようにすることは言うまでもないことであるが、育成を目指す児童の姿を評価項目の視点から想起し、指導の充実につなげることは、授業改善を図るうえで重要である。指導と評価の計画は、育成を目指す資質・能力と指導内容及び評価の具現化を図ることに資するものであるため、児童の実態等に応じて、適宜修正を加えながら柔軟に作成することが大切。

81

技能の習得のみに偏らない指導を

- 1 技能の習得を目指しつつ、知識の指導や(2)の指導を学習の中心にしたい
→よく考えている子、よく伝えている子をほめる
- 2 (3)の「できる」も体育が得意な姿にしたい
→準備や片付け、挨拶、応援、認め合いなど、(3)の学びの姿を認め、適正に評価する
- 3 体育ならではの学びを実感できるようにしたい
→みんな違っていいけど、みんなで行き届く、みんなが笑顔になる

82

授業改善の推進は、子供たちのため、ひいては日本の将来のために

授業提案の成果や課題を踏まえ、授業を核とした取組を進めましょう！
学ぶ教師に笑顔集まる



授業改善は未来を創る学びの改善

合言葉は、**体育楽しく逞しく**